

岐路に立つ日本



早稲田大学 日米研究機構 日米研究所教授
(元外務事務次官)

谷内 正太郎氏
やち しょうたろう

本来無器用な私は、子供の頃の運動会を楽しいと思ったことはあまりない。ただし、例外はある。綱引き競争である。日頃仲の良い人達も同じチームで声をあげて、ともに戦う姿は感動的ですからある。勝てば嬉しいが、負けても自分の責任だと思わなくても良いところが気楽である。しかし、皆が顔を真赤にして頑張っても、ズルズルと相手に引きずられていく感覚は何とも不愉快である。

今の日本には、そのようなやり切れない感覚が広く共有されているのではなからうか。時代の閉塞感、内向き、縮み志向、逃げ、守りの姿勢……。政権交代は国民の期待を大きく裏切り、政治不信はかつてない程強まっている。経済は円高はじめ六重苦にあえいでいる。国際社会における日本の存在感は低下し、周辺諸国は対日強硬策をためらう素振りを見せない(中国の尖閣諸島、韓国の竹島、「慰安婦」、ロシアの北方領土など)に対する諸対応)。

振り返ってみれば、バブル経済の崩壊以降、日本は「失われた十年」を経て今だに坂道をスリ落ちているように見える。このイヤな流れを逆転させ、再び坂の上の雲を目指して頑張る、責任ある大国として蘇ることはできないのであろうか。

偉大な歴史学者で駐日米国大使でもあったE・ライシャワー氏は一九六二年五月に講演し、「日本は世界史の行方を左右するにたる能力をもった国の一つなのです」と述べ、日本は自らの理想とそれを現実化する手本を示すことによって世界の出来事に影響を与えることができるとした。五十年後の日本人は、そのような能力を失ったのであろうか。

秀れた詩人で戦前の駐日フランス大使であったポール・クロード氏は、戦争中の一九四三年のバリの夜会で、「日本人は貧しい。しかし高貴だ。世界でただ一つ、どうしても生き残つて欲しい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」と述べた。その日本人の高貴な国民性は、昨年の三月十一日以降の悲劇を通じて健在であることが世界中の人々に認識された。

重要なことは私達が志を持って働いている各分野において、戦後の成功物語に安住することなく、果敢に突破口を開けて局面を大きく展開していくことではなからうか。幕末・明治の頃、あるいは敗戦直後の先輩達の勇氣、胆力を私達の心の中に蘇らせ、力強く歩を進めていかなければならない。「あれは駄目、これは無理」という敗北主義に日本の未来は無い。
(富山県出身)